

星空市場

「古天文学」という用語について

『天文月報』4月号「星空市場」に「古天文学という学術用語はよくない」という提言が長谷川一郎氏から出された。名付け親としては一言反論したい。此の用語の可否はかって長谷川氏自身が問題に取りあげ『天界』誌上で読者によって活発に討論されたが結局「可」とみなされた。さらに天文用語審議会でも検討されたうえで、1994年版の『文部省学術用語集』に正式登録されました。いまごろ何を言い出すのかと思う。重ねて申し上げるが、ここで「古天文学」というのは長谷川氏が曲解するような「古い天文学」という意味ではなくて、「古天文の学」と言うことです。文科系でも「古文書学」が「古い文書学」の意味ではなく「古文書の学」であるのと同じです。理科系でも「古生物学」「古磁気学」「古地震学」などがありみな同様です。これらに倣って「古天文学」と名付けました。「古天文学とは誤解を生む言葉だから気に入らない、他に代えろ」と長谷川氏にいわれても困惑します。わたしは「学」を抜いて「古天文」だけでも通用するとも言いました。英訳の palaeoastronomy は故大崎正次氏の命名による直訳で、ここでは特にこだわらないで下さい。私は「古天文学」という新造語を披露しはじめた頃から、誤解のないようにていねいに解説してきました。勿論長谷川氏にはなんべんも説明してあります。ところが長谷川氏は「聞く耳もたぬ」とばかりにいまなお曲解のまま論じておられる。はなはだ迷惑です。

大橋由紀夫氏が提案する「歴史天文学」という語は素直でよいが、それは研究資料を歴史時代 (historic age)、つまり記録文書にある天文記事に限ることになります。しかし、「古天文学」は先史時代 (pre-historic age) も含みます。わたしはすでに「ストーンヘンジ」「ナスカの地上絵」「益田岩船と酒船石」「卑弥呼の日食」など先史時代の遺跡や事物を古天文学的にとりあ

つかっておるのです。一方「考古天文学」という提案もありますが、「古天文学」は「考古天文学」と「歴史天文学」との両方を一括しています。

いろいろ題名をつけて細分類するのは悪くありませんが、題名だけ決めても肝心の研究実績がなければ無意味です。ところが「古天文学」にはその実績があります。わたしは1974年に東京天文台(当時)を定年退官した後に、思い立って「古天文学」なるものを始めました。それが1999年までの25年間に大小11冊の著書(学術書7と一般向け4)にまとまりました。「古天文学」はわたしの老後の趣味としてやりがいのある仕事でした。一つの学問を拓くには可成りの苦勞と失敗といくらかの満足感を伴いました。長谷川氏は執拗に「古天文学」の言葉どがめをしながらもその実績について全く触れていません。87歳の弱者をあまりイジメないください。

(齊藤国治)

三体問題の平衡解

天体力学でとりあつかう三体問題では、一般解は求められない。しかし特解はあり、直線平衡解はスイス生まれの L. Euler (1707-83) により、正三角平衡解はフランス人の J. L. Lagrange (1736-83) によって見出されている。

三体問題で、二体だけが有限な質量を持つ制限三体問題を考える場合、有限質量の二体が何時も X 軸上にある回転座標系を考えると、平衡解に相当する五つの点がえがける。何時のころからか、これを Lagrange 点と呼ぶ人が出てきている。多分この名前は、スペース関係の研究者が使い出したと思っている。

どんな呼び方をしようと自由であるが、最近、直線平衡解も Lagrange が発見したという記述まで見られるようになった。これは明らかな間違いである。

(ぐんま天文台 古在由秀)

編集委員 上野宗孝(編集長)、伊藤孝士、大橋正健、小野智子、斎藤芳隆、田村元秀、土橋一仁、内藤統也、和田桂一  
 平成12年5月20日 発行人 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 社団法人 日本天文学会  
 印刷発行 印刷所 〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町565-12 啓文堂 松本印刷  
 定価700円(本体667円) 発行人 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1 国立天文台内 社団法人 日本天文学会  
 TEL: 0422-31-1359 (事務室) / 0422-31-5488 (月報・欧文編集) FAX: 0422-31-5487 振替口座 00160-1-13595  
 日本天文学会のウェブサイト <http://www.tenmon.or.jp/> 月報編集 e-mail: [gjimu@tenmon.or.jp](mailto:gjimu@tenmon.or.jp)